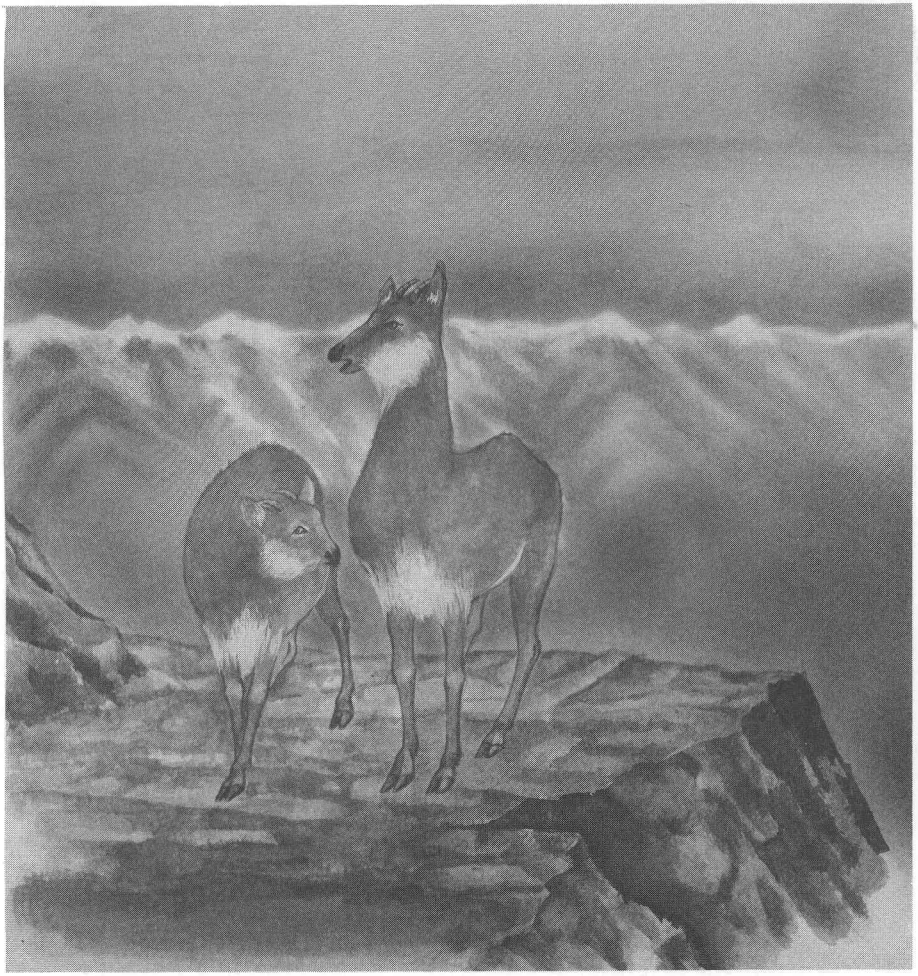
季刊

# 連句

第33号

平成三年六月一日発行



# 季刊連句　第33号　目　次

花と桜（南柏雑記　31）…… 1
二十韻私見 ……柴崎正寿郎… 2
—「座の文学」を守るために—
孤高の俳諧師 ……東　明雅… 4
—石洲橋本隆介師のことども—
歌仙三巻　膝送り　猫　柳（東　明雅・草間時彦・古館曹人）
両吟文音　北　斎（片山多迦夫・東　明雅）
花あかり（捌　坂本孝子）

亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧興行　第三十七回　猫蓑会 …… 11
第一部　正式俳諧興行　㈠役割　㈡次第
二十韻　藤浪の　捌　秋元正江
文　藤の幻影　秋元正江
第二部　二十韻　九巻　捌　東　明雅・内田麻子・金久保淑子
上月淳子・下坂元子・豊田好敏
中川　哲・山口みづゑ・若松　香
文　「配硯役」うわの空の記　梅田利子
座配をつとめて　小林千雪

「蓑虫」付勝練習　二十韻 ……東　明雅……18
「猫蓑作品集　Ⅰ」を読んで ……仏渕健悟……20
芦丈翁俳諧聞書（Ⅰ）……22
二十韻　風の訪ひ来る ……捌　文　矢崎　藍……24
歌仙　啓蟄や ……捌　滝川雅代……25
関口連句教室 歌仙二巻 花の雨 無縁坂 … 捌　下鉢清子・秋元正江……26
半歌仙　行く秋を ……捌　秋元正江……27
二十韻　風光る ……捌　式田和子
二十韻　夜神楽 ……捌　青木秀樹
雁帛往来 ……29
新刊紹介 ……23・27

表紙（かもしか）　宮　崎　龍火子

# 花と桜

## 南柏雑記 31

雅

年々に花にあこがれ見たいと思う気持が募るのに反して、実際、その見た桜に対する感動が次第に薄れて行くように思われる。

私が日本の名桜を出来る限り尋ねようと決心したのは、昭和六十一年、猫蓑会有志と吉野に行った時以来である。この時、有名な竹林院に宿して、その翌日見た花の美しさは、この地の史蹟にまつわる思い出と一緒になって、何か妖しいこの世ならぬ美を示してくれた。

それ以後、花に憑かれた私は毎年春になると、東京近郊の桜はもとより、北は福島県三春の滝桜、信州高遠の小彼岸桜、岐阜根尾谷の淡墨桜、小田原入生田の桜、京都常照皇寺の九重桜、大阪広川寺の西行桜、はては沖縄本部の寒緋桜と、機会を見てはうかれ出るのは、もはや限られた余命の為であろうが、花を見たいと願う心に反比例して、桜を見た時の感動が薄くなって行くのは何故であろうか。

今年は四月九日に「日本さくら地図」を便りに、青梅市の金剛寺と梅岩寺を尋ねた。両寺とも折から満開の紅枝垂は確かに見事であったが、それだけで、あの吉野で味わったような感動はおこらなかった。それから十日ほど経って、私は思いがけず大阪造幣局の「通り抜け」の花を見ることになった。「通り抜け」は、御承知の通り、八重桜の並木が絢爛豪華で、有名ではあるが、何か俗な感じがする為だろうか、「日本のさくら地図」の中にも掲載されていない。しかし、猫蓑の連句にはしばしば花の句に、この「通り抜け」が登場して私も一度は見たいと思っていた。

その日は前日からの風雨が強まって、吹き降りの天気であった。たまたま、京都のホテルのラジオニュースで、当日が「通り抜け」の観覧期間の最后にあたると聞いたので、予定を変更して急拠、大阪の天満橋駅まで直行し、傘を傾けながら濡鼠になって造幣局に赴いたのであったが、この悪天候がかえって幸いして、晴天ならば鮨づめの押すな押すなであるという花見の客も疎らであった。

楊貴妃・御衣黄・普賢象など、名前だけはよく知っている大輪の八重桜が、それこそ真盛りで、それぞれ風雨の中に身もだえするように、枝を揺らしながら妍を競っている有様は、私に何時か吉野の花を見た時のような妖しい感動を与えてくれた。これが花なのである。

金剛寺や梅岩寺の桜を見た時は、例の「日本さくら地図」で予備知識があり過ぎたのである。「通り抜け」の場合は全くその逆であった。「秘すれば花」と言った古人の意が、よく分かったとともに、花と桜の区別もどうやらおぼろげながら分かって来たようである。

# 二十韻私見

## ―「座の文学」を守るために―

柴崎正寿郎

ここ数年来、連句界には新しい連句形式が次々と創案されている。芭蕉以降、連句形式の中では歌仙（三十六句）が主流をなし、連句といえば三十六句の歌仙という程に、歌仙が一般的な形式として定着していた。それが最近になって、歌仙より句数の少い新形式が生れるようになったのは何故か。結論を端的に云えば、連句一巻を巻きあげるに要する時間の短縮である。では何故時間の短縮が要請されるのであるか。それは連句という詩の問題ではなく、むしろ現代人の生活のあり方に関する問題である。現代生活は交通も通信も非常にスピード化し、人々のコミュニケーションは大変拡大化した。それにも不拘、現代人は何故か慌しくせわしい生活にあけ暮れている。その原因は何なのか、その詮索は社会学者に委せるとして、吾々連句作者もより短時間に首尾完成した連句一巻を巻き上げたい希望を持つ。それは現代人の常に時間に追われる慌しい生活様式から必然的に生れてくるようである。

私はかつて関西で連句教室を持ったことがあった。勉強にくる人の多くは家庭の主婦であり、その家庭は市中にはなく、市周辺の郊外にある。会場はどこからも平均して集りやすい市の中心部にあったが、集合時刻を昼食後の午后一時にした処、かなりの遅刻者があった。主婦たちは、家庭の昼食を済ませ、その後片付けまでして出てくるからである。よって集合を一時半に改めた。終了時刻も右の時間から逆算すると、四時か四時半が限度である。もしそれを越すと六時の夕飯仕度の為に反対に早退者が出るであろう。以上のように現在大都市で連句会勉強会を実施すると、その勉強時間は正味二時間半か三時間位が限度となる。この時間で三十六句の歌仙をまくのは無理であり、実際に半歌仙で終ることが多い。この半歌仙を次回に続けることは、連衆の異動もあり、折角の気分も中絶のため、序破急の面白みも失われ、作品として成功しにくいし、何よりも座の文学としての興趣は半減する。東明雅先生の近刊書「新炭俵」に「二十韻の提唱」の一文があるが、それによると、歌仙一巻を巻くのに平均四時間という。これに会場往復時間二時間を加えて、六時間の拘束時間は、家庭の主婦にとってはそう気楽にとれる時間ではない。

そんな折、岡本春人先生が、半歌仙と同じ十八句ながら、歌仙と同じ内容効果をあげるため、表六句の禁忌を緩和して、序破急のテンポを早める「居待」「出花」などの新形式を創案した。私たちはこの新形式によって、短時間内に、

ともかく一巻首尾の連句が巻けるようになったのである。ただ後で考えると、私たちは既に歌仙用の勉強用紙を持ってをり、たまたま十八句が歌仙の初折句数と同じのために、便宜上その用紙を利用した。実はこれがよくなかったと思う。春人先生の「居待」創案の意図や式目緩和によるテンポの改新など十分理解しながらも、同じ句数、同じ用紙から、連衆は仲々歌仙風な句運びから脱出できないようであった。それに何んといっても最大の原因は新形式に未習熟な私の捌である。

それから程なく、私は明雅先生が新形式二十韻を創案された事を知った。私は春人先生の居待形式の経験から、まず私自身が新形式に習熟することが大切と考えた。私は明雅先生門の式田和子さん秋元正江さん次いで福井隆秀さんについて文音による二十韻の指導を受けることにした。そしてグループの勉強会では二十韻専用々紙を使うことにした。これは加成の効果があったようだ。用紙の形式から新形式の認識が形によってまず捉えられたからである。また二十韻は半歌仙の十八句より二句多い二十句構成であるが、伝統ある歌仙と同じく二つの折と表裏を持つことで馴染やすかったようだ。歌仙三十六句は、所要時間が現代人の生活時間帯から取りにくくなったとは云え、内容的には四季それぞれの多様さ、二花三月の配分、表・裏、折などの設定による序破急の変化進行の面白さ、恋の場面も異る二場面を出しやすい、など巧みな構成が確立している。先人が遺したこの素晴らしい形式の内容を、時間短縮の新連句形式に於てどれだけ守れるか—それが最大の課題であったと思う。明雅先生の二十韻は、実作者でありまた連句研究の第一人者として、一巻の所要時間を二時間半から三時間を限度とした場合、表裏ある二折を残す句数として、二十句が歌仙に近い内容を守るぎりぎりの線だったのであろう。ただ単に時間短縮だけを考えるなら、二、三句の短連句を始め、昔から色々の形式もある。連句の時間短縮は、連句一巻の内容と深くかかわる問題である。伝統ある歌仙の内容を保持しながらの時間短縮として、二十韻は成功している形式だと思う。

連句の先人たちは「座」によって何人かの連衆が「時」と「処」と「情感」を共有しながら、ゆっくりと座の時間を楽しみつつ作ったものと思う。その連句から、現代は時間の共有を奪わうとしている。時間短縮の連句新形式は、そうした時代に対する抵抗である。試みに平成二年度の連句年鑑をみて頂きたい。掲載作品の約半数は連句という座の文学の大切な要素である時間の共有を離れて文音形式という時間に余り拘束されない道を歩み始めている。かつての座の文学は次第に通信文学に変貌してゆくかも知れない。連句一巻の時間短縮は、それによって多忙な現代人にも句座する機会をより多く与える一手段として理解したい。明雅先生も春人先生もそういう意味で新形式を工夫されたものと思う。

私は連句形式の時間短縮化は「座の文学」を守るためにこそ大きな意味があると思っている。

# 孤高の俳諧師

## ―石洲橋本隆介師のことども―

東　明雅

石洲橋本隆介師は、明治三十五年五月十九日、三重県伊勢市で出生、昭和六十一年一月二十一日千葉県船橋市で逝去された。伊勢はもともと俳諧の連歌発祥の地であるが、師の家は歴代、伊勢外宮祠官年寄師職並びに徳川幕府直轄伊勢山田奉行所の御旗本支配組頭の家筋で、早くから伊勢派の俳諧師野末汀鴎に学び、二十歳で正風伝統の立机を許され、事実上、荒木田守武（一五四九没）に発し、岩田涼菟（一七一七没）・中川乙由（一七三九没）から、和田希因（一七五〇没）、三浦樗良（一七八〇没）を経て、明治・大正の大主耕雨まで、輝かしい歴史を残した最も正統の伊勢派俳諧のいわば最後の俳諧師だったのである。

私は師の生前、お目にかかったこともなく、また、同じ千葉県に住みながら、実はそのお名前さえも存じ上げなかった。平成二年十二月、柏連句会の席上、連衆の一人五十嵐譲介君から教えられて、遺著「正風俳諧　左義長」の出版を知り、早速、御遺族の橋本宣彦氏に連絡して、その一冊を頒けていただいた。

その後、橋本氏から丁重なお手紙とともに、昭和三十一年刊の「俳諧芭蕉の雫」、昭和四十六年刊「俳諧陽田の土」、昭和五十五年刊「正風俳諧新秋津洲」の三部も頒けていただき、始めて伊勢派俳諧師としての石洲師の全貌を知ることができた。

そもそもこの伊勢派という名称には二つの意があるようである。それは「俳諧大辞典」にもある通り、①守武の遺風をついで、望一（一六六七没）以来伊勢に育った俳団体の総称。②涼菟・乙由を中心とする伊勢蕉門の意。この二つである。

②の伊勢蕉門は各務支考（一七三一没）の山田結庵以来、急速に発展して、涼菟・乙由を中心に強固な地盤をかためた。そして遂には北陸筋にも勢力を伸ばし、支考の没後は、加越の俳諧は概ねその傘下に帰したという。

猫蓑派の俳脈を遡ると加賀の北枝（一七一八没）―希因（一七五〇没）―闌更（一七九八没）などの錚々たる伊勢派の俳諧師に達するのであるから、猫蓑派が右の②の意味において伊勢派と称することはむしろ当然であるが、石洲師の俳諧は右の②とともに、①の条件にもぴたりとあてはまっている。いわば、石洲師の俳諧は、末流伊勢派とでも言うべき猫蓑派から見れば、その本家筋にあたると言ってもよいものであろう。今まで知らなかった伊勢派本流の俳諧の実態が、石洲師の著書を通して明らかになったことは嬉しかった。

「芭蕉の雫」（昭和三十一年刊）は、「正風俳諧の伝統美」という論文を巻頭に、歌仙八十九巻、百韻六巻を掲載、

附録として「雲夢書斎詩集」を収めている。また、この書には「全国蕉門連衆名録」として、当時の俳諧師百三人の名が記されている。

この百三名の中には西尾其桃の外、無名庵主小野霞遊・駿河の加藤一兆・埼玉の宮内富宝・大分の上田鷹居・出雲の山内好一など、当時著名だった俳諧師を網羅しているのは、当時の伊勢俳諧の立場と力とを示すものであろうが、その中に、当然ながら信濃の抱虚庵根津芦丈の名が見えるのが懐しい。自賀石洲厳父還暦全国巨匠文音連吟「蒲公英」の巻にナオ十句目として、「組盃を飾る床しさ　芦丈」と見えているから、石洲師は芦丈先生と風交があったことが察せられる。

また同書には、石洲門として三峯庵南天・神風館窓月・花下亭二季・半日庵蝸牛の名が載せられ、その外に伊勢市在住の俳諧師三十二名の名が連ねられ、当時の伊勢俳諧の盛況を物語っている。

「芭蕉の雫」所収の歌仙八十九巻の中には漢和三巻、和漢五巻計八巻が包含されている。一例をあげれば、

自賀長男品彦誕生　昭和八年五月

和漢行　初幟の巻

武の誉文の栄に初幟　石洲
　栴檀放馥庭　翠影
袴客礼儀作法も弁へて　楓園
　さもうまさうに莨吸ひけり　洲
風前孤月黄　影
露下数峰青　園

表六句のみを挙げたが、これで作品の大体の水準と傾向は察せられるであろう。石洲師は十三歳の時から実父実幹より漢詩漢文を習い、その深い素養が自ら発揮されたもので、和漢・漢和などの作は決して一朝一夕ではできるものではない。石洲師の門人、蝸牛・窓月・南天・二季らの人々は、それぞれ、師を相手に和漢・漢和の作を物しているが、これはこの一門の俳諧の特色を示すものであろう。たとえば、

露の巻　昭和二十九年十月

祖翁をしのびて

露乎霊乎芭蕉の雫尊くも　石洲
　狭庭しゞまを蓑虫の鳴く　南天
歌人はいざよふ月に筆とりて　窓月
　袴の色も時代つきなり　二季
紋瓦凍てしがままに白々と　天
　蕾咲きそめ尖る冬薔薇　洲

この巻を前に掲げた「初幟」の表六句に比較してみると、その表現にこそ相違は見られるが、丈高い発句に、脇はその家の庭の有様、第三には客人の様子、四句目はその会釈、五句目は天象を詠み、折端はその下の景を叙べるというパターンが決まっており、背後には濃厚な古典趣味が感ぜられる。

この漢詩・漢文を中心とする古典趣味は、芭蕉に始まり、蕪村によってさらに昂揚されたところのもので、それ自体

はすばらしいものであるが、美濃派とともに平俗を旨とする伊勢派の伝統にはあまり見られぬものである。師が少年の頃から親しまれた漢詩・漢文、あるいは日本の古典の知識があまり深く薫染していたために、師自身も自らそれに制約された面があったのではなかろうか。

漢詩・漢文も明治以後、西洋文学に取ってかわられ、急速に魅力を失って行く。一方、俳諧も同じ頃衰亡の一途を辿っていた。そのような時代に、俳諧を受けつぎ、漢詩・漢文に深い教養と愛着を持った者が、どのような運命を辿ることになるか、それは想像することができるところである。

石洲師は伊勢派の正統を襲ぎ、漢詩・漢文が得意であったために、明治以后の西洋文学一辺倒の潮流に合わず、その為に晩年は殆んど、その俳諧を理解し、相手となる人を失い、俳諧師としては不本意と思われる独吟を作って僅かに心を慰めることになったのは、まさに近代における俳諧師の悲劇である。

「芭蕉の雫」の巻頭論文「正風俳諧の伝統美」には、俳諧から発句を取り出して俳句と名づけ、脇句以下を非文学として斬りすてて、俳諧衰亡の一因を作った正岡子規ならびにその一派の文学に対して、忌憚のない批判が加えられ連句の伝統に対する讃美と鼓吹がなされている。この文章は何時書きおろされたのか、はっきり分らないが、すくなくとも「芭蕉の雫」が発刊された昭和三十一年九月より遡ることは確実であり、昭和三十年代の日本人の連句に対する冷い態度を知る私に取っては、いかにこの論文が勇気に富んだ、先見の明のあるものであるかが十分理解できるのである。

昭和四十六年刊の「陽田の土」は、地誌的要素が強い作品であるが、それでも巻頭に「正風と新派の内面機構に就いて」という文章とともに両吟百韻一巻と、両吟歌仙三巻・三吟歌仙一巻・四吟歌仙一巻の外、独吟歌仙八巻を収録している。このうち、両吟の歌仙一巻と百韻一巻とは前著の掲載洩れであるという。要するに、対吟者としては門人の二季・南天・窓月に限られ、あとはすべて独吟であった。

昭和五十五年刊の「正風俳諧新秋津洲」には「芭蕉の雫」に掲載された「正風俳諧の伝統美」が再録され、さらに「明治以后の神風館に就いて」なる一文が加えられ、神風館十九世を称した藤波窓月の襲号のいきさつを記し、前後の伊勢俳諧の堕落のあとを描いている。

外に百韻二巻、歌仙五十五巻、この中には和漢・漢和二十四巻を交じえているけれども、これらはすべて独吟であった。

石洲師は昭和五十年代になってからは、昭和六十一年に没せられるまで、完全に知友・門下から離れ、独吟を楽しんでおられたのである。

平成三年刊の遺著「正風俳諧左義長」は和漢六巻、漢和四巻を含む歌仙四十巻が収録されているが、これもすべて独吟である。

左義長の巻　　昭和五十七年一月

疾風一陣闇を過りて大左義長　　石洲

鉾杉繁み和む初鶏
寒食と詩箋に染めし筆なれや
明治老来いとどすこやか
遠つ山淡き白きは月の出か
野菊完し温泉への道
笛太鼓胡弓も妙に秋祭
三更知らず泌みる移り香
身は恋の焔の相を寂光と
色即是空西鶴の文字
懐しむ梅津の村もこのわたり
青葦原に残る月影
飛来り飛行く蛍小さけれ
農薬被害消えて年経ぬ
伊勢志摩の道路工事は順調に
二軒茶屋餅匂ひさへ好し
チラホラとテレビラジオの花便
古き真垣を胡蝶かろやか
朝霞棚引く中ゆ延暦寺
吾妻偲ばぬ山號の碑に
旅にして事ども多き憐情や
燭台一つまぼろしもがな
南島の峠を越せば霰空
浮寝伸々集ふ水鳥
文鎮の代りと思ひて石選み
翁年八十極む篆刻
世のさまに瞼重きは常ながら
北方領土返還の急
美しき暁にも似つる月今宵
砧止む頃小男鹿の声
露しとゞ萩の瑞枝は垂れしまゝ
船江の里を終の栖と
かにかくに釣道楽は親譲り
御奉行慕ふ事蹟数々
比ひなき花前山の名所図絵
春の日影を落す文机

この完成された美の世界は、やはり伊勢の名家に生まれ、幼年時代から漢学・漢詩、そして俳諧の世界に没頭した石洲師独自のもので、門人と言え、到底うかがうことの出来ぬものであろう。わが好みに従い、わが好みの作品を作る。そこにはもう悲劇性など感じられない、悠々自適の境界がある。

あるいは思うに、石洲師は俳諧の祖である伊勢の荒木田守武の有名な独吟千句（守武千句とも云う一五四〇成立）に倣って、廃れ切った俳諧に、何か新しい道を示そうとされたのではなかったか。

師の本意が那辺にあったか、今は確かめる術もないが、私は昭和三十年代、連句が非文学として世間から一顧もされなかった時代を経験しているだけに、あくまでも孤高の道を力強く歩み続けられた石洲師とその作品に、深い敬意を捧げるものである。

# 歌仙三巻

## 膝送り猫柳

冬と春かくれんぼして猫柳　明雅
　午後から風の荒るるきさらぎ　時彦
雛の店思ひがけなく二丁目に　曹人
　笑ひ顔する怒り顔する　照敏
待宵をちょっぴり欝となってゐし　彦雅
　そろりそろりと穴に入る蛇　敏人

谷川に燃えうつりけり紅葉山　雅人
　すっぽんぽんで寝まるならはし　彦雅
ラーメンのあとの匂ひが気にかかり　人雅
　いざとなったら銭で済ませる　敏雅
隠れ家は近江の国の懐に　彦人
　北を埋むる雪しまきなり　敏人
流行の見せびらかせるスキー靴　彦雅
　学生寮でイッキイッキと　雅敏
城跡の夏の満月揺れはじむ　人雅
　鯉黒々と沈みたる池　彦人
花散りて十一面の大頭　敏人
　村人集ひ草摘みに行く　彦人

そのあとに勘三郎の影朧　敏人
　ティラミスつくる姉といっしょに　彦雅
通るたび肩に觸るるよ小鳥籠　雅敏
　神田祭の噂さまざま　人雅
爆撃の楯に市民をあつむると　敏人
　唇を合せる戦場の砂　雅敏
なるやうになれとはやなるやうになり　彦人
　たったいちどで孕むかなしさ　雅彦
月明の回顧展いますぐそこに　人敏
　えんまこほろぎうすばかげろふ　敏彦
すさまじの胸の肋のくっきりと　彦雅
　夢のまにまに山婆となる　雅人

枯草に野辺の送りの煙立て　敏人
　畦に交はる街道の辺　人雅
子を連れてビーグル連れてお散歩に　雅彦
　行進曲はトランペットを　彦人
庭の闇ほっとふくらむ花容れて　人敏
　旅の半ばに暖かき雨　敏彦
　平成三年二月十七日
　於　俳句文学館

連衆　東　明雅（出句順）
　　草間時彦
　　古館曹人
　　平井照敏

## 両吟文音　北　斎

初富士や北斎九十三転居　多迦夫
　酔筆多謝の去年今年なり　明　雅
昼の月淡さも淡し東風吹いて　迦
　芝焼く煙低くたなびく　雅
この春の円と株価が懸念され　迦
　頭叩けばニャンと啼く猫　雅

老僧（ウ）の諧謔世にもをかしけれ　雅
　鉄瓶の湯の急に噴き出し　迦
サイレンと鐘けたたまし消防車　雅
　目口もあかぬ寒風の中　迦
指さしてあれが択捉国後と　雅
　恋ゆゑ強き女なりけり　迦
古酒二合そろそろ管を巻くつもり　雅
　もめ事多く忌籠の月　迦
庭めぐる露の草鞋履きしまゝ　雅
　翁まがひの杖も一本　迦
この冷えに花の寿（いのち）も延びるらん　雅
　復活祭の歌聞こえくる　迦

朝寝（ナオ）して窓の外なるセーヌ川　雅
　ローランサンの色はほのぼの　迦
還暦を過ぎても男まだ迷ひ　雅
　鮨をつまんで結ばれし縁　迦
降りやまぬ酸漿市の雨はげし　雅
　東も西もわかぬ地下街　迦
巨人ファン阪神ファンが入り交り　雅
　阿呆役者の天才が逝く　迦
生涯を笑ひと酒と賭事に　雅
　床の茶掛をしみじみと見る　迦
月といふ字の大巧は拙に似て　雅
　稲妻走る安曇野の空　迦

訪（ナウ）ね来し信濃は山河冷やかに　雅
　酬い難きは師恩友情　迦
小綬鶏の声遠くより響くなり　雅
　智恵授りの人のちらほら　迦
花の下問はれ顔なる占者　雅
　町の空ゆく赤い風船　迦

平成二年八月二十八日　満尾

# 花あかり

坂本孝子 捌

花あかり木の芽あかりの青梅かな　みづゑ
　鉄路に立てばもゆる陽炎　孝子
夏近き勾玉かざる襟もとに　貞子
　巻毛の犬の尾をふりて寄る　元子
ムニエルの少し焦げたる宵の月　瑞枝
　エチュード弾けるやや寒の窓　元枝

尼様の横顔白き諸霊祭　元枝
　懺悔の名もて詠ふ欲情　枝
突然に電気のやうに恋したの　ゑ
　四駆ふるはせてかけるエンジン　孝
朝シャンも病める美学のひとつかも　貞
　硝子ののれん氷屋の月　同
川風に涼み浄瑠璃のど渋く　同
　地方選挙に雇はれて主婦　孝
ゴルビーの土産あくのがお楽しみ　枝
　テニス倦きたと凝りしラクロス　ゑ
絹延べてさくら吹雪を染め抜きに　元
　飛行機雲の空にうららか　貞

亀鳴きぬ情報過多の世を泳ぎ　ゑ
　武具馬具武具馬具舌がもつるる　枝
ジプシーの屯す古城石畳　元
　不吉の色の赤い蝋燭　ゑ
そこだけがこまやかに揺れ尉鶲　同
　樽いっぱいに漬ける野沢菜　貞
住みかへて身の上話新しく　枝
　しなだれて抜く胸の札束　孝
からっぽのつむりがっくりギニョール　貞
　念入りに見る死亡欄から　ゑ
月光の路地響かせて夫の靴　元
　帰化松虫の甲高く鳴き　枝

拭き込みし庫裡に新蕎麦いただきぬ　元
　縦走プラン地図をひろげて　枝
山椒魚ひそみゐるらし渕よどみ　元
　水神様の幡のかけかへ　枝
花と客しばし留めて啖呵売　孝
　弥生名残を惜しむうま酒　貞
平成三年四月十六日
　於　青梅　坂上旅館

山口みづゑ
米谷貞子
下坂元子
大窪瑞枝

# 亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧興行

## 第三十七回　猫蓑会

第三十七回猫蓑会は四月二十五日(木)、江東区亀戸天神社社務所で、同天神藤祭りの一環として、正式俳諧を興行、奉納し、そのあと、二十韻九巻を首尾した。

第一部　正式俳諧興行　「藤房や」一巻

第二部　二十韻九巻

(一)　役　割

宗　匠　秋元正江
脇宗匠　式田和子
副宗匠　内田麻子
執　筆　福井隆秀
知　司　豊田好敏
副知司　瀧川雅代
座　配　小林千雪
座　見　仏渕健悟
花　司　原田千町
配　硯　梅田利子
同　　篠原達子
同　　蒲原志げ子

(二)　次　第

一　席改め
二　席入り
三　配硯
四　献花
五　執筆登場
六　文台捌
七　知司挨拶
八　俳諧興行
九　花前
十　玉串奉献
十一　花の句披露
十二　端作り
十三　吟声
十四　文台返し
十五　作品奉納
十六　知司挨拶
十七　退席

## 二十韻　藤浪の

藤浪の揺れて八百八町かな　好敏
晴れをよろこぶ仔雀の群　明雅
春障子開け放ちやり文机に　健悟
眼鏡のままでうたたねの人　和子
ガウディの塔にかかりし三日の月　千町
摘みしサフラン籠にいっぱい　雅代
新走り酌み交はしつつ恋に酔ひ　麻子
猫と女房残る惜金　志げ子
海原はしんと凪ゐて真帆片帆　達子
骨折の腕布で吊るなり　千雪
鬼の豆鬼無里の鬼を打ちに出て　清子
厨にひびく葱刻む音　利子
両親も聞いて驚く旅プラン　郁子
蚊を追ひ払ひ熱き抱擁　澄子
月涼し今山の端を離れけり　淳子
西鶴の本ありし銀行　あかり
偽名画つかまされしが運の尽き　文子
トロットギャロップ手綱引き締め　啓子
花ごろも帽子も対の老婦人　正江
半ばとなりし弥生狂言　執筆

## 藤の幻影

秋元正江

花ぐもりの季語に対して、藤ぐもりとも云える空模様で、まっ盛り寸前の藤房は、つまみ細工の花かんざしが目前に揺れているようなきっぱりした藤色で、傍の淡いピンクの藤房とあるかなきかの雨に濡れて清新な美しさである。

藤祭り正式俳諧も五年目を迎えて、明雅先生御指導の夫々の役割もすっかり身について、要所々々の発声、越天楽の奏楽、吟声の他は藤の社に濃密な時が過ぎ、配硯、花司の落着いた中にも華やかな所作、執筆隆秀さんの淡々として風格ある文台捌き、玉串を持たれた神官の往来など、正式俳諧は猫蓑会の財産になったと思う。

宗匠の大役をおおせつかった私は、緊張と責任でシャガールの眸のように境内の反り橋辺りにもう一人の自分をおいてきたような思いであった。

天神社では特別に、豊太閤所持の「秋野の文台」その他明治三十二年二月二十五日巻かれた俳諧連歌懐紙（この日は菅原道真公のお亡くなりになられた日であり、毎年忌日に巻かれていたとのこと）等の宝物を展示して頂いた。

会も果て最後の連衆と反り橋近く迄きたとき、端々しい高島田に水色の着物、白地に藤房を描いた帯も胸高に、日本画の世界、いや新派の舞台から抜け出たような、粋な美女にお会いすることができた。藤の雨の中、藤祭りの幻影として忘れることができない。

# 藤祭り

東　明雅　捌

流れ来る両国囃し藤祭り　明雅
雨暖かに顔を出す亀　啓子
母子餅黄粉たっぷり作りゐて　八重子
親もそはそは家庭訪問　芙紗
冬の月樹々のざはめき鎮らず　みちよ
道に迷ひし角巻のひと　信子
「さよなら」のか細き声が忘られず　啓
5時になったらぱっと飛び出す　信
マイホームシニアプランは五十より　よ
棚にならんだワインあれこれ　八
河童忌に河童の皿に水足して　紗
土用艾を肩に大盛り　八
SPに身を護られて行く旅行　啓
北方四島かへらざる月　紗
敗戦の日の夢さめて半世紀　雅
雁の渡るを夫と眺めん　よ
烏羽玉の長き黒髪結ひ上げて　八
ピアノのひびくマンションの窓　信
公園は静かなりけり花明り　紗
姉と妹のゆするふらここ　信

# 藤の風

内田　麻子　捌

集ひ来て苑はむらさき藤の風　麻子
春のショールをはづす反橋　智恵
浅蜊桶土間にひっそり置かれ居て　志げ子
髭堂々と背伸びする猫　欣二
人声にキャンプ出づれば月明し　よしえ
熱き恋びと槍の雪渓　二
同じ姓名乗る一族一部落　え
日露戦争苔むしし墓　麻
ゴルビーも海部首相も疲れ果て　二
笛は引き分けノーサイドなり　志
子に作る玉子酒とて共に酔ひ　恵
なんにでも効く頭痛腹痛　え
さりげなく大丈夫かと肩抱き　恵
プレイボーイの殺し文句よ　志
夜々涙常蛾奔れる望の月　同
葡萄を餌に邯鄲を飼ふ　恵
啜る茶に話途切れて秋深し　二
ジャムを煮る母日日之好日　麻
五分咲きも又やさしくて花の奥　え
地鳥の声森もかすみぬ　二

# 藤の雨

金久保淑子　捌

をろがめる媼つつみぬ藤の雨　淑子
社務所の軒に並ぶ子雀　健悟
厨辺に桶の浅蜊の汐ふきて　達子
カリヨン時計の電池とり替ふ　澄子
凍る月ストンヘンジをいぶかしみ　啓世
むき合ふふたり冬林檎噛む　悟
思ひつめ恋を恋せし切なさよ　世
役にたたないうちの猛犬　澄
ゴルビーはいつ眠るやら起きるやら　同
じゃんけんぽんで決める席割り　達
脛の蚊を打ちて焼酎ひとり酌む　悟
鯉を生け捕る人の深皺　世
病む女の笑まひ戻れる嬉しさに　悟
夜ながの枕転々として　世
雲間より万里長城照らす月　澄
大きな壷に活けし実柘榴　達
引き下す文台の反古堆く　世
あくび指南はまだ志願なし　澄
花の門くぐりて集ふ新社員　悟
旅鞄置く春の十字路　達

## 藤房の

上月　淳子　捌

藤房の五尺の丈を誇りけり　淳子
春も名残りの白き玉砂利　室谷淑子
楽しげに凧作りする親子ゐて　利子
御飯ですよと階下より呼ぶ　雅代
船蟲（ウ）のすばやく走る月の岸　同
日焼けくっきりハイレグの痕　利
ふたりだけわかる暗号テレックス　同
原発事故の写真公開　淑
肥えふとる銀座の鼠ぬけぬけと　淳
アフターファイブの方が大切　代
悴（ナオ）みし手に甘栗のまだぬくく　淑
お布施少なし寒風の中　代
地上げ屋は八方やぶれすっとんで　利
月のマンション女住まはせ　淑
そぞろ寒どうしてくれるおなかの子　利
どっしり坐る畑の種なす　代
戦（ナウ）友会ふえることなき集ひなり　淳
嫁・孫自慢酒の肴に　淑
真盛りの花の間に間に岩木富士　利
あふれんばかり囀りの声　代

## 藤波や

下坂　元子　捌

藤波や遠つ代偲ぶ神の庭　元子
囃に合はせ舞ひ遊ぶ虹　実郎
凧作り親子の顔の和やかに　郁子
おやつは好きなケーキコーヒー　千雪
山峡（ウ）の流れも涼し宵の月　久美子
蛇に驚きしがみつく彼　雪
この先が思ひやらるる新世帯　郎
国際問題いつも出遅れ　美
砂漠には四輪駆動必須とか　郁
革の袋で醸す馬乳酒　同
霜（ナオ）の上笈の持仏を取出して　郎
嘘止まらぬ早発ちの客　美
一目ぼれしたるマダムのそはそはと　郎
梨の匂ひの唇を吸ふ　美
内浦は鮭大漁に沸きかへり　郁
立待月の見えかくれする　雪
自分史（ナウ）の稿着々と進みゐし　美
人に迷惑かけざるが夢　郁
花前線津軽をこえて松前に　郎
空色となる飛びし風船　雪

## 江戸の藤

豊田　好敏　捌

広重の描く名所や江戸の藤　好敏
のどかに響くお囃の音　千町
もてなしも獲ったばかりの諸子煮てしげと　和代
膝に甘える小さきむく犬　町
サーカス（ウ）の道化師仰ぐ月涼し　と
古い盥に浮いてこい浮く　町
姉として慕ひしものを恋仇　代
どうでもいいと見つけたる彼　敏
職つなぐ本のますます数増して　町
枯山水に砂を引く僧　と
てのひら（ナオ）に戴く湯気の冬至粥　町
鶴を写してもう二十年　代
面とればおかめひょっとこ皆老人　と
保険外交紅を真っ赤に　代
きぬぎぬの月は斜めに峡の出湯　町
怨念置きて蛇穴に入る　と
呑（ナウ）みさしで御免とばかり案山子殿　敏
超特急のうちのワープロ　と
伯林の壁に日本の花植ゑよ　代
よちよち歩きに蝶のまつはる

## 藤房や

中川　哲　捌

藤房やゆらりと揺るる雨のなか　哲
　声をこぼせる巣隠れの鳥　冬乃
雛の間に母似の吾子の熟睡して　シズ
　コーヒー淹れてミルクたっぷり　隆秀
都庁舎にかかりし月を仰ぎつつ　弘子
　色なき風に拾ひたる恋　ズ
あの人も私も芋が好きでした　子
　猫ががりがり柱ひっかく　秀
黄昏はそら恐ろしき空屋敷　乃
　ヨットに飽きてハングライダー　子
乾杯のビールジョッキになみなみと　ズ
　生臭坊主経いい加減　秀
自衛隊機雷の数が気にかかり　乃
　泣いて別れて写真抱きしめ　哲
ウイドウと騙しすり寄る寒の月　乃
　赤の広場にいつか薄雪　ズ
糖尿を一病として息災に　子
　金釘流の便り届きぬ　秀
花筵それぞれ開く手弁当　ズ
　田螺も脚を伸ばす昼過ぎ　乃

## 藤まつり

山口みづゑ　捌

大前を浄めし雨や藤まつり　みづゑ
　春惜しみつつ渡る反り橋　冨美
目張煮るゆきひら鍋の匂ひゐて　正江
　ピアノ弾く子に漫画読める子　文子
冬欅梢に懸かる鎌の月　杉亭
　しばし憩ひし丹頂の羽　江
馴れ初めは紀ノ国坂の行き帰り　亭
　心はゆれるタワーラウンジ　子
掃海艇いよいよ出すと決断す　同
　後手後手になる投手交代　美
飼主に似てプードルも夏痩せし　子
　穀やぶりてふビールちびちび　亭
新発意の東の廓母の里　江
　抱きしめたは衣通りのきぬ　ゑ
満月の波きらめける湖の紺　美
　人間ドックで告げられし秋　江
邯鄲の旅の案内はワープロで　同
　先生ひとり山の分校　亭
枝垂れたる花の舞ひ来る昼下り　文
　囀の中走るタンデム　美

## 藤房や

若松　香　捌

藤房やかすかな風も見逃さず　香
　琴弾鳥のめぐる池の面　あかり
弁当の諸子ふっくり炊き上げて　悟朗
　書き取り帳をうめる百遍　和子
手焙りをすすめられたる縁の月　遊
　プレイルームに対のセーター　景翠
カードでは払ひ切れない恋の残　和
　色即是空　空即是色　り
小半が適量といふ下戸と呑み　遊
「でんでん虫々」ちょっとはづれる　翠
黒人のマラソン選手汗光り　朗
　掃海艇の乗船を拒否　り
嫁入りをひかへ猫にもいとま乞　和
　★トランタンでも未だバージン　遊
三日月にいたづら悪魔ぶら下り　朗
　村上龍よむすずろ寒　遊
呆けはじめすっかり焦げし焼秋刀魚　翠
　効能書も知らぬ湯治場　香
山々のめぐる安曇野花万朶　翠
　茶揉みの香り低くたゆたふ　り

★トランタン…フランス語・三十才

# 「配硯役」うわの空の記

梅田利子

二、三日前の天気予報では、藤祭りの当日は雨との事、何とか予報がはずれてくれればと願いましたが、朝出掛ける時はかなりの雨。幸いにも亀戸天神に着く頃にはすっかり上がっていて、丁度駅でお会した正江様と、まだ人出のない境内を、しっとりと雨に濡れた七分咲きの藤の花を賞でながら、しばしそゞろ歩く事が出来ました。

正式俳諧の配硯のお役をさせて頂くのは今回で四度目。四度目ともなれば、そろそろベテランの域に達しなければならない筈ですのに、人前では上がり屋の私、相変らず硯箱をかたかたと鳴らせて居りましたのを懸命なる宗匠、脇宗匠様方には、お見逃しなさる筈もございません。

それに比べて、達子様、志げ子様は、光ケ丘近隣センターの最初の練習一回で万事をお呑み込みになり堂々としていらっしゃるのには感心させられてしまいました。

一昨年の時雨忌に初めて配硯役をいたしました時、大変嬉しい事に正式俳諧のビデオテープを頂戴する事が出来、次回からテープを見てお浚いすることが出来て大変重宝いたしました。又家族にも、百聞は一見に如かずで、居ながらにしてこの様な立派な儀式としての俳諧の認識を新たにしてもらう事が出来て、その後私は大手を振って連句会に出掛けられる様になりました。

猫蓑会に入会して間もなくの頃、初めて正式俳諧を拝見しました時、私にとって大変な驚きでした。連歌の世界ならまだしも俳諧にもこんな立派なセレモニーがあるなんて。明雅先生の連句辞典の「正式俳諧興行」を見ますと、最初の文台捌きを中心とした俳諧興行は、京都妙満寺で寛永二年（一六二五年）頃、貞徳以下連衆十名で百韻興行が行はれたと書かれています。

儀式と言う視点から日本の伝統的な芸道を思い返して見ると、茶道を始めとして、果ては民間に伝承される神事まで、連綿と続く伝統的な儀式は数限りなくあります。日本人はセレモニー好きなのでしょうか。古来から日本人はそれぞれの道に、精神を昂揚し浄化させる方法を儀式という形式の中に培かって来たのかも知れません。

国文学四五〇号「獅子門翁忌古式俳諧」（鈴木勝忠）を読ませて頂きますと、その冒頭に「連歌以来の公的な儀式俳諧が乱雑非礼に陥りがちな俳諧の座の逸脱へのブレーキとして（以下略）」と表現していられるのもなるほどなと思はせられました。

執筆隆秀様の堂々たる文台捌を拝見しているうちに、私の連想癖は、ひょんな事を思い描いて居りました。

今から二十数年前に開かれた札幌冬季オリンピック大会の開会式。純白のコスチュームを身にまとい、スケートをはき、聖火を手にしてトラックを一周する少女の姿、その荘厳なまでのセレモニーの雰囲気に感動させられたものでした。後日の新聞に一フランス人記者が、その開会式に感動して今日この様な荘厳なるセレモニーを演出出来るセンスを持っているのは日本人だけであろうと感想を述べているのを脳裡に思い浮かべ、正式俳諧とオリンピック開会式、我ながら可笑しな付けだなと苦笑しながらふと現実に返ると、文台返しも終りに近づいていました。いよいよ最後の納硯、知司の好敏様より、そして対座の志げ子様へと暗黙の目と目の合図を交して、おもむろに蓋を持ち、三人一緒にゆっくりと立ち上がりました。最後の緊張の一瞬でした。

# 座配をつとめて

小林千雪

雨が降ったり止んだりの天候ではあったが藤祭りのお囃子が下町情緒豊かに亀戸天神の庭園を響きわたり、いやが上にも浮き立つ思いがした。そうした中で亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧興行が催された。時に平成三年四月二十五日、正に藤の花盛りの日であった。

A・C・Cの連句教室に入門してまだ西も東もわからない私に、思いがけなくも座配の役をつとめよとのご指示があった。つまり案内役である。難しい役ではなさそうなのでお引受はしたものの、身の引き締る思いがした。

定刻の午後一時、会場は満席の盛況ぶりであった。中にはテレビで催しを知り世田谷から駈けつけたという婦人もおられた。正面の床の間に位置するところには、東郷平八郎閣下の書かれたお軸が飾られ、豊太閤愛用の贅を尽くされた文台や昔巻かれたという貴重な一巻などが陳列されていた。

知司の豊田好敏様が興行開始を告げられ席入りとなる。座配の出番は一番先である。先ず宗匠の秋元正江様をご案内し、脇宗匠式田和子様副宗匠内田麻子様とつづき、最後に貴賓の土屋実郎先生と小林しげと先生をお席へご案内し、座配の役は一応終了となる。あとは執筆の福井隆秀様が席を立たれる時袴の裾を直したり、脱いだ羽織をたたんでおくのである。私の役目はそれで終了する。

個人的な話で恐縮ですが、三月十六日に左手首を骨折してしまったので、この大事な役を果せなかったらと思い、すぐその旨秋元様に報告し、別の方をとお願いしたところ、あと一ケ月先の事だからきっとよくなりますよと励まして下さった。幸い興行の数日前にギブスが外され、ぎごちないながらどうやら無事に果たすことができた次第である。終ってみれば貴重な体験ができたことを感謝したい気持でいっぱいになったが、初めての経験でやはり緊張気味であったことは否めない。

さて私が連句にご縁をもてたのは、先輩のおすすめがあったからで、最初は連句とはどういうものなのか知りたい程度のことだった。いざ入門して実作にかかった時、これは大変なことになったと痛感した。そもそも浅学非才な私には到底ついてゆかれるものではないと悟りました。しかし先輩は根気よく、噛んで含めるように指導して下さり、温かく包み込んで連句の真の良さを説いて下さったのである。

猫蓑会で初めての仲間に入った時でも、初心者に対する心づかいは並大抵なものではなかった。その思いやりの心根が一巻巻き終えた時、言い知れない楽しさにつながることを身にしみて味わったのである。

勉強すればするほど高度の教養を要する奥の深い文学だと思った。それだけに逃げ出したい衝動にかられることがある。その反面これほど人間関係の温かく思いやる心が深まるものは他に類をみないような気がするのである。

優れた仲間と座を組んだ時、足手まといになりはしないかと気が気ではなかった。あまり連句の難しさばかり話すとこれから学んでみたいと思う方に影響してもいけないと思うので、私なりに結論を出すとするならば、ともかく実作に励んで回を重ねてその都度経験しつつ努力してゆけば連句ほど高尚で高度な遊びはないと思うのである。

付勝練習二十韻

# 蓑虫

東　明雅

| | | |
|---|---|---|
| 十四句目 | 電算三課セクハラの罠 | 藍 |
| 十五句目 | ゴミ袋つつく不気味な烏たち | 妙子 |
| 十六句目 | | |
| 治定 | ちょいとそこまですててこの月 | あかり |

| 切 | 日 |
|---|---|
| 締 | 20 |
| 句 | 月 |
| 投 | 7 |

1　夏の合宿蛮からの月
2　土用の灸を月笑ひよる
3　有明月に開く大蓮
4　溝浚へして清き月影
5　夕立過ぎてのっと出る月
6　怪談芝居真夜中の月
7　月の浜辺のビーチパラソル
8　外寝の人を照らす月影
9　藍干す上の淡き昼月
10　月の泉の映す天地
11　蝙蝠が舞ふ月の大川
12　皇居の森を照らす夏月

※がであろう。3は実に清々しい景を出し、打越の気分からも一転している。たとえば、上野不忍池あたりの夜明けの風景と見ると、まさにぴたりであるし、付味も非常によい。ただ、ここで大蓮を出すと、二句先きの定座の花の美しさをそこなう恐れがある。4この句も前句との付味もよい上に、打越からは一転している。ただ、「清き月影」と月光の美しさを強調するとやはり深夜の月になりはしないか。その点5など夕立の終ったあとに出た月は、深夜の月ではないだろう。6怪談芝居は夏狂言である。怪談に不気味な烏は付け過ぎと思われる程ぴったりであるが、「真夜中の月」はやはり失敗であろう。7この月はやはり夕方ごろの月だろう。その点はよいが、14セクハラ・15ゴミ袋・16ビーチパラソルと片仮名三句続くのがまずい。尤もゴミ袋は芥袋と漢字で書けるだろうが、セクハラは漢字では書きようがない。片仮名の打越も嫌われる。8外寝の人を浮浪者と見れば、前句にぴったりの句である。しかし、他の句の打越であろう。9この句は実に美しい風景であり、月も昼月とことわっている。しかし、これは全くの田園風景で、前句の都会的雰囲気とは異質である。だから、付いてないとは言えないが、あまりぴったりしないのである。10これもすっきりした叙景の句で、打越からは一転しているけれどもこの月もやはり深夜の月を連想させ、従って、付味があまりよくない。11も同様である。12不気味な烏に皇居を付けたのは意外性があっておもしろい。しかし、この夏月も工夫が足りないのではあるまいか。たとえば、「皇

13　のそりと覗くごきぶりの月
14　月夜の浜に遠花火きく
15　ひそかに簞笥を脱ぐ月
16　空に真赤な河童忌の月
17　月にこぼるるマロニエの花
18　蚕豆の殻捨てに行く月
19　新都庁舎の裏に出る月
20　月夜にひそと衣脱ぐ蛇
21　コレラのベッド覗く月影
22　毒消売の仰ぐ昼月
23　井戸浚へして汗を拭く月

今度の付句で私は夏の月を出すことをお願いした。しかし、考えてみると、いささか無理だったかも知れない。というのは、前句が烏が群れている景である。だから、朝の月か昼の月ならば烏も活躍するだろうが、夜になると、もう塒に帰るのが普通であろう。3の有明月、9の昼月などは、その点を考慮しての付けである。1も「夏の朝練蛮からの月」という句が副えてあったが、これは「夏の調練」の誤記であろう。さて、この1は何か句の形が打越と似ている以外に、セクハラと蛮からの違いはあれ、それらの集団の特徴を述べている点も共通する。これでは転じとは言い得ないだろう。2土用灸は病体を出したのは一工夫である。しかし、この一巻12・13・14と室内の景情を描き、やっと15で外に出たのに、この16でまた内に入るのはいか※居の新樹かかる昼月」あたりとしたら、随分、気分も情景も変わるであろう。13この「投げ入れの月」はおもしろいが、「ごきぶり」はやはり深夜に出た感があり、第一、発句に「蓑虫」が出ているから、遠慮すべきであろう。14も同様、ことに花火は夏の正花にもなるものであるから注意。15は一応おもしろい。16不気味さは前句によく付いているが、これも深夜の月の感じがする。17・18は何となく昼の月かせいぜい夕方の月で、餌をはむ烏とそう異和感はない。ただ、17のマロニエの花が、匂いの花にさわるだろうことは3と同様であるし、18はゴミ袋に近すぎて、打越の気分からもあまり転じていない。19は新しいところに目をつけているが、このままでは秋の句であり、その点でまずい。20不気味な烏に衣脱ぐ蛇はよく付いているが、これもおそらく深夜の景となり、許容しない読者も存在するだろうし、第一、14の気分とも転じない。21前句には付くけれども、打越からの転じはなく、また、この月もおそらくは深夜の月であろう。22の毒消売は懐しい風物詩だ。これも前句にはよく付いているし、転じもあるが残念ながら、他の句の打越である。23は4と同じだが、これなら昼の月の感じがある。治定のあかりさんの句は、その軽い気分、明るい調子が打越から一転し得ている。そして、市井の風景を描いた前句に対し、市井の生活そのものを写して、付味もぴったりである。この月は決して深夜の月ではない。よってこの句を頂戴した。これは三夏・自の句である。次は夏を続けても雑の句でもよいが、人情の句を付けて欲しい。

# 「猫蓑作品集Ⅰ」を読んで

佛渕健悟

「猫蓑作品集Ⅰ」の歌仙二十六篇、二十韻三十七篇、半歌仙一篇を眺めていく時の楽しみの一つは、恋句の工夫であった。色々な恋句を読ませていただいて、驚いたり、呆れたり、笑わされたり、新機軸を発見したり、しみじみ共感したりと、まことに連衆の数だけの恋句があるものと実感した。

恋句の付合いで印象に残ったものを思いつくまま書き出してみたい。

六（ナオ）　白靴はいて骸骨のシャツ　郁子
七　モルジブの黒き魔性の肌を抱き　みづゑ
八　一夫多妻は男冥利か　隆一

「夏木立」の巻

みづゑ氏の句は、カタコーム（地下墓所）の旅行者が奇妙なアバンチュールを体験するイメージだろうか。前句の謎をうまく生かしたという感じがする。八句目も面白く付いていると思う。魔神（ジン）のように頑強な御主人様にもアンニュイの影が……。「男冥利か」の「か」は願望か懐疑か。答えは次句に。

三（ナオ）　飛行船影ゆっくりと紫蘇畠　蓼艸
四　野の媾ひを襲ふ雷神　孝子

五　あかときの腕の中には鳥の羽　艸
六　兎小屋には妻と子がゐて　みづゑ

「濃りんだう」の巻

じっくり味わう付合いである。

八（ナオ）　眼もと涼しき人に抱かれむ　道子
九　あけがたの夢一面の罌粟の中　聖子

「花三千」の巻

九　優美と至福の相を写す恋離れ。

三（ナオ）　ししおどし鳴れば鳴ったと四畳半　砂洲男
四　菊枕には夫の寝息　篤子

「伊勢」の巻

ナオ三は、可愛らしい新妻の仕種が見えるようである。「菊枕」の句は、前句の可憐な余情を受け良く付いていると思う。

菊枕と言えば杉田久女のことになるが、松本清張の短編「菊枕」には、虚子に贈る菊枕を久女がせっせとこしらえるくだりがある。聞くところでは、菊枕というものはあんなむやみに菊の花を詰め込むものではないそうであるが、どうなのだろう。いずれにしても、女性からこんな枕を作って貰う男性が果報者か否か。安眠には程遠い感じがしてならないのだが、少しはひがみが入っているかも知れない。この付けは「移りの付け」ということになるだろうか。

四　死ぬの生きるの夜の明けるまで　弘美
五　凍蝶の行きどころなき朝の月　弘

「鳥の歌」の巻

ウラとがらり変わって、デスペレートな状況。次のナオ六、「古き机で寒卵割る　直民」という付けに一条の救いが見える。

七　老いらくの手足荒れたる美女のゐて　曹人
八　捨てられるなら爺も共々　時彦

「大暑」の巻

しおりがあって好きな付けである。笑いの中に哀れがあり、哀れの中にあたたかみがある。「連句辞典（東京堂出版）」に、しおりとは、前句から感じられる不安の気持ちに対する同情の心で付句を仕立てる、そこに現れた情感をいう、とある。

恋の句のことばかりになってしまったが、連句は勿論恋句だけに拘泥してはならず、世の荒波を嘆じ、小鳥や野の花や小さな生き物に心を和まし、神仏に思いを馳せ、卑近なものから格調高いものと、あらゆる事柄が「後ろを振り向かない」連句の決まりに導かれて付け進められる。この原稿を書くために普段より繰り返し読むことになったが、連句のことを色々と考えるきっかけとなった。例えば次のような付合い。

九　サミットの果てて大使のお茶の会　淳子
十　角を揃へてリネン畳まれ　久美子
十一　かくれんぼ月昇りても鬼は来ず　雅代
十二　残る蛍の伝ふ芝草　哲

「秋立つ」の巻

連句の「付け」と「転じ」について考えさせてくれる。十一の「かくれんぼ」の句は、前句と合わせて味わった時、託児施設で母親の帰りを待ち詫びている子供の様子が浮かんでくる。ひょっとしてお父さんがいない子かなとか、そんなことも連想する。

しかし、「角を揃へてリネン畳まれ」の中に見えている生活に疲れた母親は、その前の句、「サミットの果てて大使のお茶の会」という句と取り合わせた時には、もうどこにも姿は見えなくなってしまう。ここにはシャンデリアの輝く広間できびきび立ち働く、この腕まぶしい娘たちばかりである。

同じように「かくれんぼ」の句を今度は、十二の「残る蛍の伝ふ芝草」と二句で味わってみると、これはまさに良寛さんの「面影の付け」となって、十一の句から子供はいなくなってしまう。連句の不思議と面白さである。

子供の頃教室で退屈してよく書いたものに「ダマシ絵」というのがある。じっと見つめていると今まで見えなかった図柄が見えてきて、そのうち又元に戻ってと、「図柄」と「地」が注意の変化でくるくる入れ替わる現象である。こういうことも思い出して、明雅先生が言われる「玉が転ぶように」という付けのありようのことなど、色々勉強させていただいた。

# 芦丈翁俳諧聞書（Ⅰ）

N　あのまあ、明治時代には旧派は旧派なりで、それは相当な俳諧師が、全国にかなり沢山居たですだ。それらの人に習ったのが、その孫弟子位になって、ハガキが一銭五厘の時分（注、大正から昭和初期）にね、生半可に習った者同士が文通で、何巻まいた、どうしたなんていうのが、相当の年令になって来て、その地方のまあ、大先生というような向きのがいたる所にあるですだ。

H　はあ

N　それでまあ、西の方でね。まあ、今、西の方に行けば丸亀の梅游（注、吉岡梅游　平成元年十二月三十日歿）だけどね。

H　梅游さんという方は、最初から先生のお弟子さんでしたか。

N　それは何だだ。わしとごく仲よくやった高崎の竹邨（中村竹邨）ね。あの人がまあ始め教えただね。それで竹邨氏の言うにね、梅游の奴、あれ悪達者だからして、ちょっとしぼってくれなっていってね。

H　その竹邨氏はどなたに習われたわけですか。

N　竹邨はね、秋香（茂木秋香　昭和十六年十二月三十日歿）という。

H　そうそう秋香先生でしたね。その秋香先生はまたどなたに、

N　それはかつみという人ですだ。上州の仮名でかつみという人ですだ。これは明治時代の有名な人ですだ。上州に烏渕（上野国碓氷郡烏渕村水沼）という所あるね、そこのお殿様だだ。四千石か五千石位のね（矢羽勝幸氏著　俳人下平可都三によれば同処の名主）。それで戒名など院殿大居士ですだ。そのまあ、かつみという人はえらい人でね。それで真庭念流のね、剣術を習う。するとすこし行ったら目録を呉れたちうだ。何の事だか知らんが貰って、そしたところが、仲間の連中がね、目録と言っちゃ叩くちうだね。こりゃ俺が目録を貰ったから、野郎ども叩くんだと、それからして師匠にね、ま、この目録は返すと、目録だけの力にならねえうちに、こんなものくれるから、野郎ども俺の頭叩いてたまらねえと言って、それからみっしり稽古したなんてわ、剣術の方も相当なものだちうだ。それからしてあれかね、あの郡は何郡だったかね、あすこから国定忠治が出て、国定忠治はかつみさんが処分するだね。

H　それじゃ、幕末から明治にかけての人ですね。

N　そうですだ。それで、忠治を磔柱に上げといてね、（注、嘉永三年四月二十一日のこと）それからかつみさんが床几に腰をかけてて、「忠治何事でも遺言があ

るなら言え」とこう言ったら、忠治が礫柱からね、「この期に及んで何も言うことはありません」、「上御役人衆、下御役人衆、甚だお手数を相かけまする」と言って、「これでよろしい」と言ったちうだ。これを秋香老に話して、「忠治はえらいもんじゃねえか。礫柱の上にいて、今槍で突かれる前に、上御役人衆、下御役人衆、甚だお手数を相かけまする、立派な言葉じゃねえか」と、そう言って話したと、それから秋香老もかまわねえ人だもんで、「その槍で突かれた時にゃどんな顔したね」と言ったら、「馬鹿野郎」というわけでね、「そんな事を聞く馬鹿がどこにある」ちうわけでね、「破門するぞ」ちってね、でかくおこられたというだわね。いくら忠治がえらいたってね、横っ腹へ槍を突かれて笑ってるもんじゃねえだ。そんな話もありね、そして、かつみという人は何だだ、連句の早い人でね、その頃ね、越後に流芳(?)という人があってね、この人がまあわらんじを二十年はいた。行脚することをわらんじはくというが、二十年も旅っころびで、そりゃよくこなれたいい連句でね、それが越中の黒髪庵だと言ったが、旅へ出た時おちあって、やあ久しぶりだったなあちゅうわけでそれから発句見せあったところが、とてもよくなっていてね、やあ流芳さん、いい句を詠むようになったなちゅうわけで、それからかつみも句を出して、両吟を二巻立てて、二人ではこぶと、そしたら早いとも早いとも、まあその二時間で二巻まいて、西と東へ別れて行ったというが、二時間じゃねえ、それは正味四時間かかっていると、でも二時間だっていうじゃねえかったところが、越中の霜井のいわく、そりゃ、俺のうちの上りはなの事だで、俺が一番よく知っていて、それは人が誇張して、そういう事をまあ二時間に二巻まいたというが、それがいい巻だだ……（続く）

注　この一文は、昭和三十八年三月二十二日、松本市浅間温泉士族の湯で、根津芦丈先生のお話を聞き書きしたものである。当時、先生は九十歳だったが、身心ともに壮者を凌ぐほどのお元気であった。

## ☆新刊紹介☆

### 『新炭俵』　東　明雅　著

「新炭俵」の軽み

中川　哲

明雅先生の近著「新炭俵」を掌にしてまづ装幀の肌合ひの佳さに心が和む。編された歌仙、二十韻、配された小文の数々、まことに見事な付け合せの美酒佳肴で、私のような醜い人の世の騒乱にひきずりまわされて浮足立った毎日を送っている俗人にとっては、快い警策の一撃であった。

「夏の日」「猫蓑」に次ぐ、この「新炭俵」が、連句復興の柱となって、混迷しているかに見える現代連句界の狂騒をも鎮めてくれるのではあるまいか。風雅が、洒落が、侘びが、軽みが、明雅先生の屹立した美意識によってもの柔かく、しかも厳しく、私たちの心に植えつけられていくのを感じる。

（角川書店／二〇〇〇円）

「猫蓑通信より転載」

## 速水昌子さん追悼俳諧連歌

### 二十韻　風の訪ひ来る

青柳に風の訪ひくる同窓会　小泉　満子
　灯に臈たけし雛のかんばせ　鍋島富貴子
紙ふうせんボンと優しく打ち上げて　井田　淳子
　まだらの牛を飼うて八年　大谷　容子
車（ウ）とめ嫁のため息月凍る　高城　道子
　ロスの研修ほの揺るる恋　小川　治子
トラバーユ水晶玉で占って　三田　礼子
　濁流の岩見えつ隠れつ　佐藤　尚子
木梯子を武者駆けったる犬山城　鈴木美恵子
　命をこめし宗匠の茶事　矢崎　藍
ゆ（ナオ）っくりと葉末までゆく天道虫　容
　セールス稼業汗をふきふき　美
許せない現場おさへしせつなさに　尚
　愛と憎しみ織りしまんだら　道
月まどか御ほとけ衆生を抱きとり　礼
　秋なす漬けし紫紺あざやか　富
鵙（ナウ）鳴いて自称リードル教師なり　小田原紀慧子
　丘のかなたの明治浪漫　治
咲きそむる花に愁ひの旅をして　藍
　別れこもごも駅前の春　紀

平成三年三月二十七日起首　於犬山ホテル
二十八日満尾　於明治村

矢崎　藍　捌・文

先日は楽しい旅をありがとうございました。

おかげさまで昌子さんの追悼連句も、鍋島さんに助けていただきつつ、ともかくも巻きおさめることができました。

校合のプロセスでは、昌子さんにも私にも連句の師である東明雅先生（蕉風伊勢派宗匠、連句協会顧問、信州大学名誉教授）また、猫蓑会の大先輩である福井隆秀兄にもお目通しいただきました。お二方とも「さすが才媛ぞろいで、初めての方がほとんどとは思えぬ。速水さんのよい供養になったのでは」とおっしゃってくださいました。拙い捌きと致しましては、理解力と勘抜群の連句新人のみなさまに出会え、楽々な連句行でありましたこと御礼申し上げます。

帰ってから新刊の『新炭俵』（東明雅著　角川書店）を開きましたら、昌子さん捌の二十韻がのっていました。この本を見ずに逝かれたのが残念です。その中の彼女の恋の付け句、

溜息と熱き眼差し扇置く　杉亭
　伯爵夫人オペラグラスを　昌子

いかにも彼女らしいすてきな句ですね。この本は芭蕉の炭俵の体裁をとり、完成度の高い現代連句作品をおさめ、連句、二十韻の初心入門教科書としても適切です。昌子さんをしのびつつ、読んでいただければと思います。

# 歌仙　啓蟄や

瀧川雅代捌

啓蟄や掌に置く旅ごころ　雅代
　水辺ははやも角組める芦　元子
レガッタのオールの見事揃ひゐて　澄子
　レストハウスでミルクコーヒー　一恵
窓ごとに月を映せる新庁舎　利子
　残業らしき影のやや寒　元

去来(ウ)の忌句集上梓と定まりぬ　同
　電話の向ふ声はソプラノ　利
明眸のかの教へ子を妻にせん　同
　人に背を向け貘のうたたね　恵
湾岸でぞろりと出でし評論家　澄
　雨沛然と過ぎし乾坤　元
薪能篝のゆれて月となり　同
　しのび寄る蚊をのべつ拂ひつ　澄
やはらかき肉たっぷりと運ばるる　恵
　左は奈良へ右は伊勢みち　利
ファインダーのぞけば花の散りかかり　澄
　風船見上げ幼な児の笑み　恵

天長節(ナオ)移り変りてみどりの日　利
　ファジーファジーと何がどうやら　同
克也流英語缶詰銷びしまま　恵
　寄せ木のわざを継ぐ人もなし　同
曲屋の裏にひと夜さ木菟鳴きて　元
　伏せし盃滲む寒紅　利
耳たぶに触れたる息の火のやうに　元
　あなたの腕がちょっと邪魔なの　澄
けとばして使ふ掃除機ふととまり　恵
　ふるさと遠し出稼ぎの宿　元
月今宵子を待つ母の門に佇ち　恵
　干されて軽きせんぶりの嵩　澄

裂(ナウ)鱠織部の鉢に盛られたる　元
　ポーカーゲームけふも大勝　恵
カセットに入れて又聞くメヌエット　澄
　犬と少年砂にたはむれ　利
花便りはるかに交はす姉妹都市　代
　夢のごとくにかかる初虹　澄

平成三年三月六日
於　山崎邸

# 関口連句教室

歌仙二巻

平成二年四月七日
於　関口芭蕉庵

## 花の雨

下鉢清子捌

きぬぎぬのひと降り込めよ花の雨　清子
春の炬燵に残る移り香　明雅
子どもらはお玉杓子をすくふらん　淳子
ちょっと早目にTシャツを着て　宗海
辞書をひく月天心のしづかさに　あかり
猫の尻尾もやや寒のころ　K

秋祭太鼓のひびき遠くより　治子
葷酒ひそかに山門に入る　水壺
お好み焼塩おにぎりに海苔茶漬　文子
後ろめたしや捨てし一票　淳
ワイキキの浜はむんむん人群れて　雅
浪の間に間に信天翁浮く　K
藤椅子に揺れて眺むる昼の月　治
万太郎忌のセルの着心地　壺
還暦を祝せば教授の髭白し　K
葉巻の煙細く流るる　り
スキップで少女桜の下を行き　淳
色糸つけて飛ばす風船　海

## 無縁坂

秋元正江捌

ふるさとはこの無縁坂花の寺　正江
蝌蚪泳ぎたる小さき掌のなか　千恵子
春炬燵墨の匂ひの濃やかに　郁子
メモに挟みし赤き鉛筆　徒司
月光に染まるフリュート吹きならし　利昭
放置自転車冷やかに群れ　正秋

建材の鉄のパイプに鵙の贄　千
秋田訛りが店内に充つ　昭
下戸をのこ酒せんべいで口説くなり　千
ぼくの愛人白痴美の女　昭
忘却は救ひのひとつほとけさま　司
風吹き分けて上る噴水　郁
旅の果アルハンブラの月涼し　同
レオ・フェレ歌ふスペインの船　千
血統の正しき和猫購ひぬ　同
古い時計を直すのが趣味　秋
桃咲きて南朝四百八十寺　昭
雛を飾れるみちのくの里　正

夢のことさらに覚えず目借時　壺
妻も妾もソープランドに　雅
マハラジャの隙を狙った恋泥棒　文
快楽の果はつひに奪衣婆　K
陽当りのよき山裾の冬菫　雅
サナトリュームの友は笑顔で　海
幼な児は「オトト」と水槽指さしぬ　り
鳥羽の港を出でてゆく船　海
つれづれの筆のすさびに旅日記　壺
ワイングラスに映す夕月　海
鉦叩き休みもやらず打ちつづけ　治
自然薯掘って帰る老人　雅

天皇と仇名呼ばるるおほけなさ　同
身におぼえなき何のおとがめ　壺
億と言ひ十億と言ふルノアール　海
ウォッチ消えるマジシャンの技　淳
花吹雪地につく前を掌に　り
家族揃って雛飾る歌　文

上り簗かけて観光客を呼ぶ　司
番茶を啜る薬缶いっぱい　正
都知事選いづちに神は笑み給ふ　郁
億ションは夢せめて一軒　千
妖かしの姫の腕を枕にし　秋
着ぶくれの下妻によく似て　千
ズブロッカ情熱の火のちらちらと　同
ディスコ揺るがす低音の渦　昭
漸寒に椎間板のまた疼き　千
床に吊るせし「孤舟載月」　司
菊人形大奥のこと話し合ひ　郁
予言占ひ流行るこの頃　千

右左どちら行きても駅の道　司
なんでも屋から届く新刊　昭
またすこし度を強めたる老眼鏡　千
ちょっと休憩莨一服　郁
ヒット打つ野球少年花の中　同
牛乳瓶に甘茶もらひぬ　昭


☆新刊紹介☆

連句猫蓑作品集 I

定価　一五〇〇円

始めての作品集ですが、皆様力いっぱいの密度の濃い作品が並んでおります。どうぞお友だちにもお奨めください。なお、これから毎年発行予定です。

お申込は　☎〇四七一―七二―七五四九　下鉢清子

## 半歌仙　行く秋を　秋元正江捌

行く秋を土佐路に残し帰りけり　利子
はまゆふの実のまじる家苞　冬乃
窓の月バロックの曲流れゐて　千町
アンダーラインマーカーは赤　和子
夏季講習新しき靴はきてみぬ　元子
とうすみとんぼちょっと尾を曲げ　啓世
小商ひ単車に積みし置薬　あかり
嫁は来ないし米は減反　久美子
タガログ語話す嫂悩ましく　健悟
朝から雨の日曜日なり　達子
画廊には藤田の猫の飾られて　志げ子
一番搾りの味は抜群　奉子
ぽっぺんのぺこんぺこんと夢増やし　清子
寒取りはげむ幕下の月　澄子
やたら群れ見分けもつかぬ街鴉　好敏
其角の句碑に三囲で逢ひ　杉亭
灌仏会善男善女花吹雪　淳子
もてなし嬉し田螺佃煮　雅代

平成二年十月二十四日　起首
平成三年三月十三日　満尾
於　新宿朝日カルチャーセンター四十八階教室

## 二十韻　風光る　式田和子捌

天平のくえし瓦や風光る　悠之
薄紅梅の匂ふ坪庭　和子
入学帽庇目深にかぶるらん　光夫
パソコン通信誰か割り込む　恭子
満月に妖精踊る夏の夢　光一郎
ほろ酔ひ女洗ひ髪なり　悟朗
かりそめの別れとばかり思ひしが　朋子
耄碌したと孫に笑はれ　隆彬
八十も若いと知事の真向法　恭
霙降る日も霰打つ日も　朗
雪原を駆るトナカイサンタ乗せ　朋
バルト三国烽起寸前　彬
火をつけてあげたいような皇太子　夫
唇重ね涙するたび　之
東に月傾きて静かなる　朗
ぬき菜味噌汁下宿菊坂　夫
秋寒の富士に北斎しのびゐて　恭
濃き黒潮の音に育ちし　之
花に舞ふ人ハイヒール脱ぎ散らす　朋
競ひて拾ふ大茶盛餅　彬

平成三年三月二十三日
於　青山パークマンション式田恭子宅

## 二十韻　夜神楽　青木秀樹捌

夜神楽の葛飾葛西江戸の果　明雅
追儺準備に入る仕事師　好敏
到来の赤いワインを飲み干して　英子
つやよき猫とモーツァルト聴く　碧
秋袷身にぴったりと月の下　昭子
地蔵の盆で袖を引かれる　秀樹
雌蟷螂雄蟷螂を食らふ恋　雅
うす味のつゆ更科のそば　碧
路線価のまた上がりだと人だかり　敏
VTR値切るカタコト　昭
子供の日財布ゆるめて父らしく　英
月の浜辺を帰る海亀　敏
ミサイルが飛び交ふ沙漠テント村　雅
戦車指揮する女将校　敏
思ひ出の小さき宝石耳元に　秀
七十年は夢のまた夢　雅
このごろは座敷わらしも不眠症　昭
餌付けもうまく馴れし子雀　敏
見渡せば見渡す限り花の舞ふ　秀
山並みめざし飛ばす風船　英

平成三年一月二十四日
於　電通築地南寮

## 連句会案内

❋連句教室
日　時　第一日曜日　午後一時～五時
会　場　関口芭蕉庵
文京区関口二ノ一一ノ三
（電）三九四一－一一四五

❋柏連句会
日　時　第二日曜日　午後一時～五時
会　場　光ケ丘近隣センター
（南柏駅よりバス　光ケ丘団地マーケット下車）

❋A・C・C連句・理論と実作
日　時　第二・四水曜　午後一時～三時
会　場　新宿住友ビル四十八階
朝日カルチャーセンター
（電）三三四四－一九四一（代表）

❋猫蓑会（会員制）年四回
（一月・四月・七月・十月　第三水曜日）
会　場　江東芭蕉記念館
江東区常盤一－六－三
（電）三六三一－一四四八

## 雁帛往来

▽四月三日、午後一時より柏市光ケ丘近隣センターで、正式俳諧の総練習を行なう。役員全員出席、終了後、式当日の下俳諧を作る。

▽四月七日、関口連句教室。出席十八名、二席に分れ歌仙二巻首尾

▽四月九日、午前中、浅川実験林の桜一見、午後、青梅に行き、梅岩寺・金剛寺の紅枝垂を見る。

▽四月十日、A・C・C平成三年度第一講、発句と俳句について話す。

▽四月十四日、柏連句会、会者十八名、四席に分かれ、それぞれ表六句三巻ずつを首尾。

▽四月十六日～十九日、京都北山、常照皇寺に九重桜・御車返しの桜を見る。また風雨の中、大阪の造幣局「通り抜け」の八重桜を見、さらに南河内郡の広川寺に行き西行桜を見る。

▽四月二十三日、電通連句部例会出席。

▽四月二十四日、A・C・C第二回講義。

▽四月二十五日、亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧興行。福井隆秀さんの堂々として落ちついた執筆ぶりは見事であった。あとで九席に分かれ、二十韻興行。今年もめでたく無事終了できた。

▽四月二十六日、俳句文学館で一時半より暉峻桐雨先生・草間時彦先生と三吟二十韻興行。五時満尾。


**季刊「連句」　第三十三号**
平成三年六月一日発行
編集人　東　明雅
発行人

季刊「連句」発行所
〒277 柏市つくしが丘二ノ二ノ一二　東方
電話　〇四七一（七五）一一九二
振替口座　東京七－五二一一三三

印刷所　株式会社　岩田印刷
〒277 千葉県柏市酒井根六二六－一
電話　〇四七一（七四）〇一八三

定価　一部　五〇〇円　送共
一年　二〇〇〇円　送共

# 連句辞典

東　明雅・杉内徒司・大畑健治編

三版　B6判　三五二頁　三五〇〇円

連句の実作・鑑賞・研究に必須の知識をすべて網羅！初心者から研究者まで使える本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである

**収録項目例**

〈用語篇〉挙句　会釈　一座一句　有心　打越　思いなし　表八句　懐紙　歌仙　軽み　切字　景気　五句目　差合　去　式目　四春八木

〈人名篇〉天野雨山　伊藤松宇　上田聴秋　鵜沢四丁　小林見外　下平可都三　関為山　高橋玄一郎　高浜虚子　中村俊定　野村牛耳

---

水原秋桜子編

## 俳句鑑賞辞典　二三〇〇円

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇を収め、豊かな実作の経験を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編

## 現代俳句鑑賞辞典　二八〇〇円

結社や傾向にとらわれず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編

## 季語辞典　二八〇〇円

日本の季節にまつわる言葉をスモッグ・不快指数などまで収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修

## 難解季語辞典　四五〇〇円

古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

---

**国語学大辞典**　国語学会編　B5　一九〇〇〇円

**国語慣用句大辞典**　白石大二編　A5　六八〇〇円

**国語慣用句辞典**　白石大二編　B6　二二〇〇円

**国語史辞典**　林巨樹他編　B6　三五〇〇円

**日本語　語源辞典**　堀井令以知編　B6　一八〇〇円

**京都語辞典**　井之口・堀井編　B6　一八〇〇円

**擬音語擬態語辞典**　天沼　寧編　B6　三五〇〇円

**隠語辞典**　樋垣　実編　B6　三八〇〇円

**近世上方語辞典**　前田　勇編　A5　一五〇〇〇円

**花柳風俗語辞典**　藤井宗哲編　B6　二三〇〇円

**明治大正　新語俗語辞典**　樋島忠夫他編　B6　三八〇〇円

**難訓辞典**　中山泰昌編　B5　三二〇〇円

**名乗辞典**　荒木良造編　B6　二八〇〇円

**名数数詞辞典**　森　睦彦編　B6　四五〇〇円

**あいさつ語辞典**　奥山益朗編　B6　二八〇〇円

**新版　ことば遊び辞典**　鈴木棠三編　B6　五八〇〇円

**類語辞典**　鈴木・広田編　B6　二八〇〇円

**類義語辞典**　徳川・宮島編　B6　二三〇〇円

**表現類語辞典**　藤原与一他編　B6　四八〇〇円

**新版　文章表現辞典**　神鳥・村松編　B6　二九〇〇円

東京堂出版　101東京都千代田区神田錦町3-7　電話03—233—3741～2